

「商」とは互に不協和な音階であるが、その不協和の中に協和を見出された、と親鸞聖人の音楽に對する感覺の新鮮さを賞讃する人も有る。しかし、「琴瑟相和」という語は、本來異質の樂器たる琴と瑟とですらも、努力いかんによつては協和することから、「琴と瑟とが相和す」と讀むよりは、「琴と瑟も相和す」と讀むべきであるが如く、「宮商和シテ」とは「宮商も和して」であつて、不協和を代表する「宮」と「商」を取り上げて、平等と慈悲の權化である御佛の支配したまふ淨土では、一切の不協和が無くなつてよく融和し、しかも極めて自然な相すがたにおいて協和している。という様に解釋するのが、宗祖の思召しによりかなうかと思う。

### (III) 念稱是一論

高辨が元祖の念稱是一説を反駁し、法然門下の人々は大意になつて是一説を辯護してをる。「念」字本來の意味からは、これは心理的なものであつて、高辨の説が正しい様である。しかし、實際には、念書念經と熟して用いられる場合の「念」は「聲を出して讀む」という意味をもつものである。故に、高辨の意見は一方的であり、元祖の主張は語學的にも是認せられるものである。

### (IV) 御本書の字訓釋

御本書の引用文に對する字訓釋の據り所となつたものが何であつたかということについて、今迄に判明したものに新撰字鏡・廣韻の二つが有ることを申しのべる。

### 第三 語 法

御文三の九に「モシ宿善開發ノ機ニテモワレラナクバ」と有

る。この解釋について、これは倒語で「われら宿善開發の機にてもなくば」の意である（福田義導師「御文講義」）とされてゐる。かかる解釋は「善知識のみ」の異安心を正さんが爲めであると聞いている。しかし、この解釋にては「開發」のテンスをどの様に解しているのであろうか。問題の文は、「開發」のテンスや御文の他の例などを考慮した上で、宿善開發すべき人でもわれら善知識の中には蓮師をも含む）がいなければ宿善が開發しないので云々と解したい。上引の文をもつて倒語とするのは、異解を正す爲めに自らも文を曲解するものに他ならない。誤ちは誤ちとして正すべく、誤解を生ずるからとて、語法を無視して氣儘に倒語としてしまふべきではない。文章の解釋・鑑賞に當つては、あくまで原文に素直に、あるがままの姿に於いて理解し、鑑賞して行くべきである。

### 南京の佛教史蹟

春日 禮 智

中國の古都は江北では長安、洛陽、北京、江南では南京が最も有名である。その南京は、謝朓入朝の曲に「江南は佳麗の地、金陵は帝王の州なり」とあるように、江南の中心であり、稀に見る城壁の中は、いかなる籠城にもたえうる耕地があつて、昔から秣陵、金陵、建業、建康、江寧、南京等の名に依つて知られ、六朝、明初の都となつた。佛教の隆盛は主として六朝時代で、唐、明等に次ぐ。今は曾て「南朝四百八十寺」と杜牧に依つて歌われた此の地も、明の葛寅亮の『金陵梵刹志』

を見ると、六朝の寺、特に城東紫金山即ち鍾山の名刹は殆んど廢寺となつてゐる。そして、その『梵刹志』記載の寺々も、今は著しく減少し、南京の佛教は、華北のそれのようではないが、衰微の極に達していると言つても、過言ではない。

私が最初この地を訪問したのは、昭和十一年九月、日華親善佛教使節の一員としてであつて、次は昭和十八年四月、當時の大谷大學長關根仁應先生、東方文化研究所長松本文三郎博士らの、無給の留學という了解をえて、支那派遣軍總司令部參謀部附文化調査官（秦任待遇）として一年間在職した時であつた。當時は大東亞戰爭苛烈の時で、留學しても、軍の了解なしには充分調査ができなかつたので、反つて私は虎穴に入つて虎兇をえたわけで、この時充分その機會に恵まれた。

南京の佛教史蹟は、此を城内、城外に分けて考えた方がよい。城内は中央を走る中山路中正路南門大街の線で東西に分けることができる。その中央東に雞鳴寺の景勝がある。六朝の都趾はこの寺の山下から紫金山下に至る、玄武湖の南にあり、雞鳴寺は一説に梁の武帝が三度捨身したという同泰寺趾とも稱せられてゐる。新街口の東、中山東路の江南鐵路に交叉するあたりにある毘盧寺は、南京第一の禪寺で、馬鞍山の南の古林律寺と共に、明以來の南京二大巨刹である。この二寺及び富貴山南の香林寺には立派な藏經が揃つてゐる。新街口の西、吳の石頭城のある所に、清凉寺がある。ここは後周代、法眼宗を開いた文益のいた寺で、宋の蘇東坡が、その妻王氏のために阿彌陀像とその贊をつくつて施入した寺として名高い。城の西南隅に瓦官寺と鳳遊寺がある。古の瓦官寺はむしろ鳳遊寺の地で、この

寺は戴安道の佛像、顧愷之の維摩圖のあつた寺として知られ、竺法汰、竺道壹、支道林、求那跋摩、智顛等のいた寺と稱されている。

城外は、中華門外に、玄奘三藏の分骨で名高い大報恩寺がある。昔この附近に、江南佛寺の初めと稱せられた建初寺、晋の劉薩訶、孝武帝で知られた塔のあつた長干寺があつた。建初寺は康僧會、僧伽跋摩、僧祐らのいた寺、長干寺は玄暘、慧辯で名高い寺である。大報恩寺前、少し南に、雨花臺があり、ここは梁の三大法師の一人、光宅寺法雲の講經處として名高い。又この地には、晋代帛尸梨蜜多羅即ち竺高座のいたという高座寺があつたといわれている。中華門から遙か南方に、禪宗の一派牛頭宗の法融がいたという牛頭山普覺寺、祖堂山幽棲寺があり、その東、土山鎮の南には、鍾山から移されたという上定林寺のある方山がある。この近くの鳳城郷には、梁の三大法師の一人、僧旻のいた大莊嚴寺があつたという。これらの地は何れも治安が悪くて行けなかつた。

紫金山は海拔四六九米、眞に南京の鎮めで、その南側斜面は、六朝時代數百の寺が建てられ、又多くの墓地があつたことは、高僧傳、比丘尼傳等でよく知られてゐる。その中、有名な大愛敬寺は、その址が明の孝陵の上に現存し、梁の三大法師の一人、開善寺智藏のいた寺は、今はその東に移されて、牡丹の名所靈谷寺となつてゐる。

南京驛から上海に向つてゆくと、間もなく棲霞車站につく。ここは南齊の名士明僧紹が建て法藏を開山とし、梁陳間の僧朗・僧詮らが出て江南三論の中心となつた寺で、江南では珍しい

釋迦八相圖を描いた石の立派な塔と、千佛巖の石佛があるので名高い。寺の門前には唐の高宗の「御製攝山明徵君碑」が残っている。この寺の伽藍の立派なことは、南京隨一である。

以上私は南京の現存の佛蹟について概略を述べた。その詳細は近く出ることになっている塚本善隆博士の頌壽記念論文集を御覽願いたい。中國の佛教で生きているのは江南である。江南の佛教は杭州、蘇州、揚州、武漢三鎮等もあるが、矢張り南京は地の利をえてその中心である。ただ昔の僧傳、正史、南史等をよむと、この地の佛教は六朝以來獨特のけんらんさを見せたのであつたが、今はその面影さえ極めて寥々としていることは、實に淋しい。その現存の狀況は、私の將來した拓本、寫眞、スケッチ等の參考品について御覽願いたい。

## 彌陀の印相

羽塚 堅子

### 序 說

抑々彌陀には坐立の形像ありと云えども、その印相に就いて考ふるに、凡そ四種を出でざるべし。その四種とは、

- 一 一定印
- 二 無所不至印
- 三 來迎引接印
- 四 說法印

右四種の印相はこれ四十八願印を根本となす。所謂四十八願印とは風空の二指相掄じて月輪の相をなし、地・水・火の三指を

直伸するものこれなり。地水火の三指は攝法身・攝衆生・攝淨土の意、風空の月輪は是の本願圓滿成就の意なり。即ち願我作佛・吾誓得佛・令我作佛の三攝願、五劫の思惟によつて開けて四十八願となり、忍終不悔の行、兆載永劫にして満足したることを表わす、之を四十八願印となす。今この意によつて以下四種の印に就いて之を略論せん。

### 一 一定印

一定印とは入大寂定の印なるべし。即ち蓮華台上に結跏趺坐して、右足を以て左足を押し(吉祥坐)、二手相又して仰いで臍下に按じ、二頭指を屈して二大指を横たえて頭指の端に置くものこれなり。密教にては胎藏界曼荼羅中台八葉院の无量壽佛、金剛界曼荼羅成身會五解脱輪中の西方中台の阿彌陀佛にして、この印を力端正印・妙觀察智印・最勝三昧印等と稱す。その例としては宇治平等院鳳凰堂の本尊を擧ぐる事を得。これは百葩蓮台に坐せる木彫丈六の像にして、七條佛所定朝の作という。又同じく定朝の作として山城法界寺の木像あり。新瀧築山寺の像等擧ぐるに違あらざるべし。鎌倉長谷高德院大佛は大野五郎右衛門の鑄造という。力端正印と傳う。

### 二 無所不至印

この印は慧南の云く、「兩手 $\mathcal{A}$ 字合 胎藏無所不至印也」と。空慧の解に、「無所不至印者 兩手共爲 $\mathcal{A}$ 字形。左右合則其名曰無所不至印也」と。「問 何故無所不至哉。答 右手者陽而金剛界。左手者陰而胎藏界。左禪定也。右智慧也。右之五指者 檀・戒・忍・進・禪。左之五指者 慧・方・願・力・智。然兩手 $\mathcal{A}$ 字合者 除陽和合・定慧不二。而於一印中湧法界五